

広報伊達 150

発行日 令和7年3月14日

発行者 伊達地区小学校長会
会長 五十嵐 修

編集 同 広報部

《 巻 頭 言 》



「地域で学び 地域で育つ」を支えるもの

伊達地区小学校長会副会長

佐藤 みゆき

(伊達市立栗野小学校長)

校長として三度目の卒業式が近づいています。今年度もきっと、卒業生の凛とした眼差しや姿の前に、私は胸が熱くなることでしょう。厳かな式の時間は、子どもたちの成長に思いを巡らせ、未来に向かってしなやかにたくましく歩いてほしいと心より願う時間でもあります。

本校は、有り難いことに保護者も地域も学校教育にたいへん協力的です。「子どもたちの育ちを支えていく」という地域の思いは、子どもたちの健やかな成長の土台となっており、学校にとっても大きな支えとなっています。卒業生の凛とした姿は、学校を含めた地域全体で育てた子どもの姿であることを実感するとともに、歴代の校長先生方が代々繋いでこられたバトンでもあると感謝しております。

○ 異学年活動

長年、異学年活動として縦割り班で主に清掃活動を行っています。通学班登校もしています。子どもたちは、学校のよさを「校庭が広い、みんな元気、助け合っている、挑戦できる」などと感じており、学年混ざり合って遊ぶ姿が多く見られるようになっています。

○ お話を聞く会

地域の方が、朝の「お話を聞く会」に来校し、ゆったりとした方言で、昔話を通して、人の真心や欲深さ、ユーモア、心の持ち方などをじんわりと伝えてくださっています。毎回、心を育むことを第一に考え、世相や季節に応じた昔話を準備して下さる姿には、いつも頭が下がる思いです。(「校長講話」もこうありがたいです。)

○ 地区体育祭

地区体育祭では、運営や会場設営は地域にお世話になりながら、小学校の学校行事(運動会)としてのねらいも達成できています。大人が力を合わせてがんばる姿、応援し合う姿は、子どもたちに協力や努力、運動を楽しむことを教えてくださっています。この日の思い出は、たくさんの笑顔とともにふるさとの原風景となって子どもたちの心に残ることでしょう。

○ 三世代ふれあい活動、門松作り体験活動

三世代ふれあい活動では、地域やPTAと連携し、児童・保護者・祖父母の三世代が昔の遊びを通してふれあう活動を行っています。5年生の門松作り体験活動では、地域の方が多くの時間をかけて下準備をしてくださるおかげで、子どもたちは、竹、藁などの自然材を用いて実に立派な門松を完成させています。子どもたちは、遊びや手仕事を通して、地域の文化や伝統、何より人の思いやぬくもりを感じ取っています。

本校で長く続いている教育活動には、時を超えて多くの方の思いや願いが込められていることを実感します。その価値を「学び」の視点で掘り起こし、教職員や地域に向けて語り、豊かな学びへ繋いでいくことこそ校長の役割なのだと考えます。そういう意味では、私のかかわりはまだまだ十分とは言えませんが、これからも「子どもたちの育ちを支えていく」という思いを保護者や地域と共有しながら、子どもたちのしなやかにたくましく生きる力を育むために尽力していきたいと思っております。

《 研究部より 》

学び続ける校長

伊達地区小学校長会研究部長 花 輪 忠 康
(桑折町立醸芳小学校長)

1 はじめに

私が校長として悩むことは、「特色のある学校づくり」や「学校の課題改善」です。どのような学校づくりに取り組もうか、学校課題をどのように改善すればよいのかと悩みます。そのようなとき、拠り所となるところは、校長会研究部の分科会です。研究の領域は2年に一度変わるので、「今年は『危機対応』の研究かあ…」などと思うのですが、そうした研究領域の視点から学校の教育活動を見直したり、他校の実践を聞いたりすると、自校の特色や課題が見えてくるものです。自分では分からなかったことが明らかになることが研究の面白さです。校長として学び続ける教師でありたいと思います。

【第8分科会「危機対応」】

いじめ・不登校への適切な対応と体制づくり
推進校：伊達小 堰本小 粟野小 保原小
上保原小 小国小 醸芳小 国見小

「アセスメントシート」を活用し、各校のいじめ・不登校の対応策を「対処例一覧」に整理したことが素晴らしいと思います。いじめ・不登校の状況に応じて「誰に」「どのような関わり」をすればよいかの具体的な対応が示されています。各校の取組や実践を共有することで、いじめ・不登校への未然防止・早期対応・早期解決の方法を探ることができます。

2 研究の内容

令和6・7年度の研究は「福島に誇りをもち多様な他者と協働しながら持続可能な社会を創る子どもを育てる学校経営と校長の在り方」です。伊達地区小学校部会では、第8分科会〔危機対応〕と第9分科会〔自立と社会性〕の2班に分かれて研究を推進してきました。

小学校部会では、校長会として組織的・協働的な研究であるために、「アセスメントシート」を活用して、共通実践に取り組んできました。

私は、この「アセスメントシート」は、優れたものだと思っています。どの研究領域にも汎用的だからです。校長としての指導力を発揮することができるよう、「誰に対して」「どのような関わり」をすればよいかを意識して研究に取り組むことができます。次年度の県大会でも是非アピールしたいものです。

では、私が勉強させていただいた各分科会の研究の良さを述べます。

【第9分科会「自立と社会性」】

基礎的・汎用的能力を育成するキャリア教育の推進
推進校：伊達東小 梁川小 大田小
柱沢小 掛田小 睦合小
半田醸芳小 伊達崎小

キャリア教育の視点から自校の現状や特色を捉えて教育課程を編成し、子どものキャリア形成に取り組んでいます。地域の人・もの・ことと連携を図り、学校の様々な教育活動をキャリア発達の視点から整理することで、子どもの自立意識や仕事への関心を高め、他者との関わりや協力心を育てています。地元ならではの魅力的で楽しい教育活動も大変参考になります。

3 おわりに

次年度は、いよいよ県小学校長会安達大会です。第9分科会が県大会の発表となりますが、県北教育事務所の朽木克明先生や県研究部幹事の高澤里美先生のご指導を踏まえつつ、「伊達は一つ」のスローガンのもと、地区小学校長会の研究を推進していきたいと思っています。

《生徒指導部より》

生徒指導部調査から見える今後の方向性

伊達地区小学校長会生徒指導部長 丹 野 潔
(桑折町立半田醸芳小学校長)

○ はじめに

令和6年度、生徒指導部で行った『東日本大震災・原子力災害』に係る生徒指導上の諸問題に関する3つの調査の結果及び考察はすでに公開されていますが、改めて考えてみたいと思います。

1 【調査A】子どもたちのこころのケアに向けた校長としての取組

震災発生から14年が経過するが、県内には、いまだ1,761人の震災関連の区域外就学児童がおり、昨年よりも165人減っている。しかし、地区では5人増の26人と増えていることから、該当児童が避難先からいつ戻ってきても、安心して学べる環境づくりに努める必要がある。また、校長として、区域外就学児童へ配慮しつつも、すべての児童に対して、SCやSSWなどを活用しながら、全職員で児童理解と心のケアに努めることがより求められる。

SCやSSWの活用した学校の割合は、年々増えている。特に、SCの活用回数は、調査開始以来増加し続けている。相談内容を見ると、SCとSSWは、発達障がいや不登校が多い。SCは、いじめに関する相談も増えている。課題としては、SCは勤務日数・勤務時間の不足や連絡・共通理解のための時間と場の確保が挙げられる。SSWは、タイムリーな活用や情報交換の時間と場所の設定が問題点として多く挙げられており、良さを生かした活用が求められる。

2 【調査B】「不登校」「いじめ」「虐待」「暴力行為」の未然防止と早期解消に向けた校長としての取組

不登校児童数は、県全体では前年比1.3倍増であった。一方本地区では、前年比18名の減であり、各学校の取組が成果を上げている証である。

いじめの認知件数は、本地区においては127

件と大幅減となり、重大事態は、1件と前年度と同じであった。今後もいじめの認知を積極的に進めるとともに、重大事態に発展する前に対策を講じる必要がある。

暴力行為の件数は、県全体で1,109件と前年比2.3倍と急増している。本地区でも56件と前年比+38件と大幅に増加している。特に、対教師暴力が23件（前年比+16件）、児童間暴力が23件（前年比+20件）と大きな危機感を覚える。暴力行為という重大な問題を、学校だけで抱え込むことなく、関係機関や専門家との連携を図りながら対応できるような体制づくりを進めていく必要がある。

3 【調査C】ネット・SNS利用の実態と校長としての取組

ネット・SNSを利用している児童のうち、約70%（本地区64%）が自分用の機器を持ち、保護者の目の届かないことが可能な状況の中、長時間利用していることが明らかになった。その利用内容は、8割が「動画サイトを見る」であり、次いで「分からないことを調べる」「通信ゲームをする」であった。平日の長時間利用が増加しており、生活リズムの乱れやネット依存、脳への影響が懸念される。写真や動画等の個人情報扱う機会が増えていることも推測され、ネット犯罪やトラブルも多様化かつ複雑化することが予想される。そのためにも、家庭との連携を図り、児童への早い段階からの情報モラル教育等の取組や計画的・系統的な指導の充実が重要である。

○ おわりに

今後、さらなる研修や意見交換等をもとに、各校および各児童の状況や課題に応じて策を講じ課題解決が図られることを望みます。

お忙しい中、各調査にご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。

《特色ある教育活動》

桜とともに

伊達市立柱沢小学校長 小野 忠 大

本校では今年度、3・4年生の総合的な学習の時間で、「紅屋峠の千本桜」について学習しました。千本桜は伊達市の新名所として春になると大勢の見物客で賑わいます。

まず子どもたちは、フィールドワークで桜の植えてある公園周辺を観察し、その美しさを体感して、たくさんある桜の種類について調べました。また、三十年ほど前に松林を開墾し、この地に桜を植えた方々の話を聞きました。里親制度を設けた皆さんの市民に関わってもらっていること、桜を守るため懸命に手入れをしていること、祭りを盛り上げようと地域の人々が力を合わせていることなど、将来この地が桜でいっぱいになることを思い描いた先人の思いを感じました。秋には、桜まつり実行委員会のご協力の下、千本桜の花びらを使ったキーホルダー作りに挑戦しました。レジンに桜の花びらやかすみ草、ビーズなどを入れ、固めてできあがりです。子どもたちは、創造豊かにオリジナルのキーホルダーを作り上げました。できあがった完成品は一つ一つがとても色鮮やかで素晴らしいものとなりました。子どもたちは、桜がきれいなことは知っていましたが、地域の人々の熱い思いを感じ、ふるさと柱沢のよさを強く実感していました。



これからも、ずっとずっとふるさと柱沢の千本桜を大切にしてほしいです。

霊山の新しい教育

伊達市立掛田小学校長 嶋原 啓 美

本校は、霊山のよさを学び、霊山のよさを生かし、霊山のよさを発信することで、10～20年後の霊山の未来を拓く人づくりを目指している。霊山の幼稚園、小学校、中学校が連携し、様々な取組を推進している。

【音楽を通して】

本校には吹奏楽部がある。音楽が好きな子どもたち39名が集まり、楽しく活動している。今年度は、幼稚園とのジョイントコンサート、中学校との合同練習を実施した。霊山地域の子どもたちが、音楽を通して交流を深めることができた。

学習発表会では、6年生が霊山太鼓を披露した。地域の方と中学生と一体となった伝統芸能は、観客を魅了し、生き生きと演奏している子どもたちの姿からは、霊山太鼓を誇りに思う気持ちが伝わり、圧巻の演奏であった。霊山太鼓の音は、体育館だけでなく、人々の心に力強く響いた。

【霊峰霊山登山を通して】

霊山中、小国小と本校で霊山登山を実施した。事前に、地域の方から霊山の自然や歴史に関する話をお聞きしたり、班どうしの親睦を深めたりしてから登山に臨んだ。小学生にとっては大変な道のりだったが、霊山の仲間とともに、ふるさとにある素晴らしい自然に触れ合うことができたこと、五感を通して霊山を感じることは、生涯子どもたちの記憶に残るであろう。寄りそう微笑ましい2人の子どもたちが、霊山の未来を切り拓いてくれるはずである。



編集後記

第150号をお届けします。記録的な大雪が降り、地球温暖化の影響を改めて感じさせられました。学校現場においても、働き方改革の推進や、各校の実情に応じた学びの推進といった課題が浮き彫りになった一年でした。気候変動同様、変化の激しい時代ではありますが、「伊達一つ」の精神を胸に、今後も互いに連携を深め、様々な課題に対応していきたいと思います。さて、今年度も3回の広報「伊達」を発行することができました。ご多忙中にも関わらず、貴重な原稿をお寄せいただきました皆様に、心より感謝申し上げます。